

2013 年度 主催シンポジウム 2

失敗を教育に活かす

進行 Dr Emmanuel Manalo (早稲田大学理工学術院)
主催者挨拶 小玉 重夫 (センター長・基礎教育学コース)
話題提供 市川 伸一 (教育心理学コース)
Dr Manu Kapur (National Institute of Education, Singapore, Associate Professor)
植阪 友理 (学校教育高度化センター)
指定討論 高橋 美保 (臨床心理学コース)

日時 2013 年 4 月 20 日 (土)

午後 1~4 時 30 分

会場 東京大学本郷キャンパス 経済学部棟地下 1 階 1 番教室

(Manalo) 皆さま、こんにちは。Emmanuel Manalo と申します。教育心理学者で、早稲田大学理工学術院の教授をしています。本日のシンポジウムの司会をさせていただきます。本日は、教育の現場において、失敗にプラスの意味合いがあり得ることに焦点を当てていきます。

はじめに、スピーカーの先生をご紹介します。まず、Manu Kapur 先生です。シンガポールの国立教育研究所からお越しいただきました。市川伸一先生、小玉重夫先生、植阪友理先生、高橋美保先生は、皆さま東京大学大学院教育学研究科の先生方です。

それでは、開会に当たり、学校教育高度化センター長の小玉重夫先生に、ご挨拶をお願いしたいと思います。

主催者挨拶

小玉 重夫 (センター長・基礎教育学コース)

本日は、シンポジウムに参加して下さいまして、ありがとうございます。挨拶の機会をいただき、光栄に存じます。Manu Kapur 先生、日本へようこそ。また、Emmanuel Manalo 先生には、本日の司会をお願いしています。配慮深く進行して下さることと考えています。ありがとうございます。

本日のシンポジウムは、東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センターが主催しています。シンガポールのナンヤン工科大学国立教育研究所と東大の教育学研究科が結んでいる学術交流協定により実現しているものです。日本とシンガポールには、学校を取り巻く環境のグローバル化、多文化化という共通の傾向があります。その観点に基づいて、両国とも抜本的な教育改革が行われています。

東京大学大学院教育学研究科では、私たちがカリキュラム・イノベーションとよぶ、革新的なカリキュラム開発の共同研究を行っています。本日はManu Kapur先生にお越しいただき、グローバル化の時代および多文化時代におけるカリキュラムのイノベーションについて討議することを期待しています。

Manu Kapur先生は、プラスの意味合いを持つ生産的な失敗を提唱していらっしゃいます。生産的な失敗の重要な点は、未解決の問題を探究し、批判することが可能であることを、学生が知ることができる点です。日本の学生は、解決済みの、単一の答えがある問題を解くことには慣れていますが、未解決の問題を解くことには慣れていない傾向があります。そうした傾向を克服していくためにも、生産的な失敗から学ぶことにより、数学のみならず言語、社会、公民などのカリキュラム改革につなげることが重要と考えています。

両国間の国際協力を強化する意味でも、本シンポジウムが実り多いものとなるよう期待しています。

(Manalo) 最初のスピーカーは、市川伸一先生です。ここにいらっしゃる皆さまには、もはやご紹介の必要はないはずです。先生は、研究・出版論文のみならず、学校現場における実践でも大変著名な方です。最近まで、教育学研究科長でいらっしゃいました。

市川先生は行動の人です。自ら模範を示してください先生です。そのことを示す、あるコメントを紹介します。ちょうど1年ほど前、Manu Kapur先生とともにシンガポールの国立教育研究所にいらっしゃるChristine Lee先生が東京にいらっしゃいました。その際、市川先生が、教員のみならず学生のために学校現場でワークショップを実施して、教育学習スキルを教えている様子を撮影したビデオをご覧になって、Christine Lee先生は「日本は恵まれている。なぜかと言えば、市川先生のようなトップの人が、現場で学生と一緒に教育を改善しようとしているからだ。これは大変幸運なことで、他の

国では、研究科長のようなハイレベルな先生が、学校現場でスタッフや教員、学生とともに教育改善に取り組むことなど考えられない。若い先生に任せてしまうのではないかとおっしゃっていました。

その市川先生に、最初のプレゼンテーションをお願いします。

話題提供 1

「心理学において失敗はどのように

扱われてきたか」

市川 伸一

(教育心理学コース)

Manu先生、植阪先生という二人のメインスピーカーのお話の前に、私からは入門的解説をさせていただきます。

今日いらっしゃる方は、心理学が専門とは限りません。広い意味では、教育に関わっている方だと思います。心理学、特に学習や教育に関する心理学で失敗はどのように扱われてきたかという、失敗に対する考え方の話をさせていただきます。

失敗、誤り、間違い・・・
failure, error, mistake, ...

- 日常生活でも、かつての心理学でも否定的イメージ
- 「悪いこと」「しないほうがよいこと」「避けるべきこと」
- 学校でよくある標語「教室は間違うところ！」
現実の教室ではどうか？
John Holtの指摘
子どもたちは、失敗を恐れ、隠そうとし、わかったふりをする
教師の建前と本音
「間違いは大切」と言うが、間違えたときの対応は冷たい

図 1

失敗(failure)や誤り(error)、間違い(mistake)という言葉があります(図1)。私には、これらの言葉の細かな意味の違いは、実はよく分かりません。私たちが日本語で、失敗、誤り、間違いを、同じような意味で使うことが多いと思います。日常生活で